

我が生を貫く

対談

小野田寛郎 & 大塚初重

元陸軍少尉／財団法人小野田自然塾理事長

明治大学名誉教授



小野田寛郎——おのだ・ひろお

大正11年和歌山県生まれ。旧制南海中学卒業後、貿易会社に就職、中国へ。17年入隊。陸軍中野学校でゲリラ戦の特殊訓練を受け、19年フィリピンのルバング島に遊撃指揮、残置隊員として派遣される。終戦を信じずジャングルを盾に戦い続け、49年、30年ぶりに帰還した。翌50年4月ブラジルに渡り、牧場を経営。現地の初代日本人会会長も務める。59年自然塾開設、後に財小野田自然塾設立。平成16年ブラジル空軍より民間最高勲章メリット・サントス・ドゥモンを授与される。同年ブラジル国南マットグロッソ州名誉州民。17年藍綬褒章受章。著書に「たった一人の30年戦争」(東京新聞出版局)、「わが回想のルバング島」(朝日新聞出版)等がある。

大塚初重——おつか・はつしげ

大正15年東京都生まれ。昭和20年海軍在籍中、輸送船が二度撃沈され漂流、九死に一生を得る。復員後は働きながら明治大学の夜間部に学び、32年同大学大学院文学研究科史学専攻博士課程修了。日本考古学界の第一人者として、登呂遺跡や綿貫観音山古墳をはじめ、多くの発掘を手がける。平成9年退任、名誉教授に。日本考古学協会会長、文化庁文化財保護審議会専門委員、日本学会協議会等、公職を多数歴任。平成17年瑞宝中綬章受章。著書に「考古学から見た日本人」(青春出版社)、「君よ知るや わが考古学人生」(学生社)、「東国の古墳と大和政権」(吉川弘文館)等がある。

昭和四十九年、最後の日本兵がルバング島から帰還した。

小野田寛郎元陸軍少尉である。終戦から三十年もの間、任務解除の命令が届かなかつたために島で戦いを続けてきた小野田氏の存在は、平和と高度経済成長に

沸いていた当時の日本社会に大きな衝撃を与えた。

一方、輸送船が二度撃沈され漂流、九死に一生を得て、苦学の末に日本考古学界の重鎮となった大塚初重明治大学名誉教授。生死の瀬戸際を生き抜いてきた

お二人が語り合う、我が生と不撓不屈の精神――。